

■はじめに

2月23日の土曜日に行われた富雄北小学校の創立140周年記念行事で、地域や保護者の方を対象に、この20年を振り返り、未来のことを考えた教育の話をしました。今日は、記念講演での話を少し振り返りながら、話を進めたいと思います。

記念講演では、今から100年くらい前と今の教室風景を比べ、教科書とノート、黒板とチョークを使って、先生と子どもが向かい合って授業するという学習スタイルは、100年間変わっていないということから話を進めました。

そして、「Society5.0」の内閣府の動画を使って、次の時代の社会と教育の変化を見ていただきました。新しい社会に変わり、その社会の中で、子ども達はどのように新しいものを生みだし、活躍し、自らがそこで生きていくのかということを考えてとき、学校に求められる変化は、2つあると話しました。



一つは、一人一人のニーズに合わせた学習、いわゆる「個別最適化された学び」です。

もう一つの変化は、教室の窓の外にあるものを通して学ぶ、つまり「教室と地域・社会がつながる学び」です。これは、子どもが地域・社会の中に入って学ぶ、或いは、地域の人が、学校、教室の中に入って、学校と一緒に教育課程をつくっていく、という学びです。

■「個別最適化された学び」～テクノロジーの活用で教育の主語が変わる～

先日、『EdTechが変える教育の未来』（佐藤昌宏著・インプレス社）という本を読み、著者の佐藤先生を奈良市にお招きして、話を聞く機会をもちました。佐藤先生は、現在、デジタルハリウッド大学^{*}大学院教授で、経済産業省の「未来の教室とEdTech研究会」の座長代理を務められています。

話の中で、「EdTechによって『主語が変わる』』ということが大変印象に残りました。これまでの教育は、「教師が教える」というように教育の主語は「教える側」にありましたが、テクノロジーの活用によって、「子どもが学ぶ」というように主語が「学び手側」に変わるというのです。

これまでの日本の授業スタイルは、クラスの学力層の中間層に焦点を定めて、クラス全員に同じ内容を同じペース、同じ教え方で一斉に繰り返し行うという学習方法で、100年間ずっと続いてきました。子どもの側から見ると、理解が進んでいる子どもにとってはもの足りなく感じられ、理解が進んでいない子にとっては何回聞いても分からないということになってしまいます。

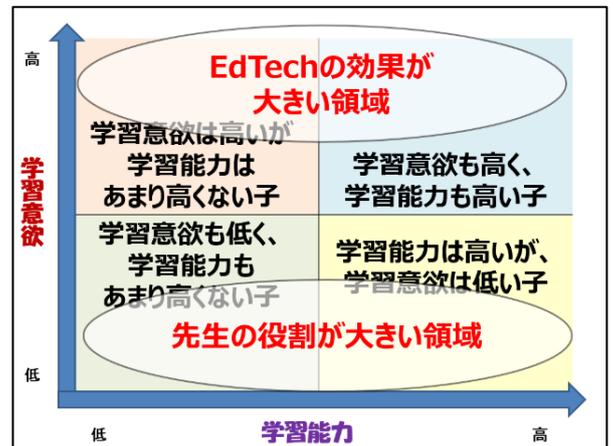
しかし、EdTechの出現によって、必要な知識は学習者自身が自らのニーズに応じて、自由にアクセスし、手に入れることができる時代がやってきたのです。学校でも、一人一人のニーズに応じた学習「個別最適化学習」を行うことができる状況になりました。奈良市の「学びなら」や「オンライン英会話」はその一例です。

■テクノロジーの発達で変わる学校・教師の役割

佐藤先生の説明によると、学習意欲の高い層ほどEdTech活用の効果が大きく、学習意欲が低いと学習能力が高くても成果がでにくく、この層は、先生の役割が大きいといいます。EdTechを活用したからといって、すべてに効果があるわけではなく、子ども達のモチベーションを上げていくためには、先生方の声かけや手助けが重要な役割を果たすのです。学習意欲の低い子ども達には、やはり先生の役割が大きいと思いました。

では、「個別最適化学習」が進むと、どのようになっていくのでしょうか。テクノロジーの発達で、

「学び合い」や「協働学習」ですらインターネットを通じてできるようになり、未来の学校は、唯一無二の子ども達の学び舎ではなくなっていくのかもしれませんが。テクノロジーの発達で、学校の役割が大きく変わっていくことは間違いありません。これからは、「教科書」と「ノート」と「黒板」を使った先生の一方通行の授業ではなく、個別のニーズに合わせた学習が提供される「個別最適化学習」に向かっていくと思われま。



■「教室と地域・社会がつながる学び」～社会の向こう側を見る教育～

先日、この会場で、中学生のポスターセッションが行われ、平城中学校の生徒が、税務署で働くためにはどんな力が必要かというテーマで職場体験に臨んだことを発表していました。私は、学校という閉じた世界、同級生や先輩後輩という子ども世界の中だけでなく、地域の多様な考え方や経験をもった大人がいる場で発表する機会が大変大切だと考えます。職場体験学習を実施する時、地域の人子どもと事業所とをつないだり、ポスターセッションを地域や事業所の人を招いて実施したりしている学校もあります。このように企画段階から地域がかかわり、学校とともに子どもを育てていこうとすることが、より深い学びになっていくと思います。



正解のない時代に、多様な価値観の中で納得解を導き出していくためには、意見の異なる相手とも協力しながら問題解決していく力や、そのための判断力や思考力、コミュニケーション力といった力をつけていかなければなりません。そのためには、ポスターセッションのように、社会と子どもを関係づけていく取組が大事です。そのときの教員の役割は、教室と社会をつなぐコーディネーターやデザイナーであり、コーチのような役割にもなります。

このように、教員は、教える側から子ども達の学びを支える側へと変わっていかなくてはならないのです。

■時代の流れをつかむ

3月3日の奈良市教育セミナーでは、「EdTech」と「データ活用」をテーマに、今、奈良市が進めている教育や、これからの奈良市の教育の方向性について考えていきます。ぜひ、若手の先生や保護者の方にも声をかけ、ご参加をお願いしたいと思います。

私たちは、それぞれ自分が受けてきた教育をもとに自分の教育観を持っています。しかし、その教育観は、自分の思い込みや、誰かから聞いたものであることが多々あります。1000万人の人がいたら、1000万通りの教育のあり方を語る、それが今の日本人ではないかと思えます。その根拠となるデータは何なのかを明らかにし、間違いのない方向に未来の教育を進めていくことが重要です。

AIの発達に代表されるようなテクノロジーの進化は、教育も避けて通ることができません。そのためには、しっかりと社会の流れをつかみ、その良さを最大限に活用して教育を進めていかなければなりません。

■おわりに

毎月の定例校長会では、「奈良市の教育の未来はどうしていくのか」「教育の将来はどうなるのか」ということについて話をしてきました。しっかりとその思いを受け止めて、教育を進めてください。

今年、小中学校合わせて19名の校長先生が、退職されます。本当に長きにわたり、奈良市の教育にご尽力いただいたことに、心から感謝し、奈良市の子ども達に代わって、お礼申し上げます。4月には、新しく19名の校長先生が着任します。残された校長先生は、その新校長先生の先導者となり、先輩としてしっかりとリードしてほしいと思います。

自分の目の前にあることに追われがちですが、少し先を見て、自分より若い人たちの先を照らせるような話をしっかりとして行ってほしいと思います。

※ デジタルハリウッド大学：2005年に開校した、日本初の株式会社立の大学。デジタルコミュニケーション学部では、教養と専門的な学術を教授研究することにより、「判断力」「創造力」「コミュニケーション力」を有し、国際社会に貢献できる人材育成を目指す。佐藤氏は、大学院の設置メンバーの一人である。